

刺というのは、「鯨組」の中、鯨に鉛を打ち込む、いわば花形。火消しという

故に、厳しい掟に貫かれており、それを破ることは死につながる。第二話「恨み

そして本書でそのことを強く感じるのは、恨み鯨、肉親を殺されて復讐に来た

なわた、かすね、5年生まれ。代小説、歴史小説を中心に評論を行う。著書に「時代小説の読みどころ 傑作力作徹底案内」他

新たなアラを探して、今日も中国を歩き回る。この人一体、中国が好きなのか嫌いなのか？

ブックレビュー 3

『粉飾 元銀行員の告白』

著者 佐藤真言
毎日新聞社 / 1575円

さとう・まこと / 72年生まれ。銀行員を経てコンサルディング会社を起業。11年に東京地検特捜部に逮捕・起訴され現在上告中

特選ミステリー
評者 / 関口苑生・文芸評論家
アメリカ社会の今を描く

粉飾しなければ、中小企業は生き残れない。『司法の犠牲者』が検察の不当捜査を訴える

評者 郷原信郎
弁護士

き残りの道はない。そのような粉飾決算を認識しつつ、銀行との間で新規融資や返済延期の交渉を行うことは、中小企業の経営再建支援のコンサルを行う上で避けられないものだ

経営コンサルとして中小企業再建に取り組んでいた「普通の市民」が特捜捜査に踏み潰されていく経過を綴った迫真のドキュメント。大手都市銀行を退職し、経営コンサルとして、中小企業の経営者に寄り添い、会社を再建する仕事に情熱を燃やす著者が直面したのが粉飾決算の問題だった。経営不振にあえぐ中小企業の多くは債務超過だ。それを決算書にありのままに書けば、銀行は金融検査で「破綻懸念先」への融資と査定されることを恐れ、たちどころに融資をストップする。決算書上は、債務超過ではないように装って、融資を受け続けるしか、生

その仕事に懸命に取り組んでいた著者に、東京地検特捜部が、容赦なく襲い掛かった。大手銀行員が在職中に実体的な会社を粉飾決算で大企業に見せかけて融資を引き出し、融資金の一部をキックバックさせた悪質な



いだったが、特捜部には、検察改革でスローガンとされた「引き返す勇氣」はなかった。定額報酬全額が粉飾指南の対価であるような話を仕立て上げ、粉飾決算による融資詐欺を指南したとして著者を逮捕した。取調べで、中小企業の経

詐欺・脱税事件の捜査の過程で、同じ銀行出身の著者に目を付け、粉飾指南の見返りに多額の報酬を得ていると見込んで捜査に着手した。著者は、所属するコンサル会社からの定額給与以外に特別の報酬は受け取っておらず、全くの見込み違

営や融資の実態、粉飾決算の不可避性を必死に訴える著者。しかし、検察官は全く聞かずに起訴。唯一の頼りだった特捜OBの「大物弁護士」は、捜査の不当性を訴えようとした著者を説得、事実を認め、ひたすら反省謝罪して、執行猶予を求める方針に徹するが、一番は2年4月の実刑、控訴も棄却。

事件そのものは、きわめて単純に見えた。深夜、三人の酔っ払いが二人組の強盗に襲われ、ひとりが撃たれて死んだのだ。だが、警察が連行したのは、一緒にいた酔っ払いのうちのひとりだった。リチャード・ブライス『黄金の街』(上・下) (堀江里美訳)は、移民が多く住むニューヨークのある地区を舞台に、事件を通してさまざまな人種の間模様が静かに語られていく。アイルランド系の警察官、容疑者とされたユダヤ人、ヒスパニックの少年、被害者の遺族……事件の関係者たちは、それぞれに事情を抱えていたのだった。

講談社文庫 / 各990円

上告後、著者が特捜捜査の不当性と事件の実態を社会に訴える行動に出ると、弁護士は「弁護方針と合わない」との理由で辞任した。見込み違いの検察捜査で逮捕・起訴され、裁判所に断罪され、弁護士にも見捨てられた「刑事司法の犠牲者」の悲痛な叫びは、多くの「普通の市民」にとつて決して他人事ではない。誰かがこんなはずじゃなかったと思ひ、恨みつらみを口にしながら生きていく。とはいえず、「どんなはず」だったのかという、それもまた思い描く自信がない。そんな日々の暮らしを、一発の銃弾が引き裂いたのだ。

アメリカの今を描いた作品は数あるが、この一作には誰も書きえなかつた地域の今がある。